

別記  
第3号様式

京都府教育委員会教育長 様

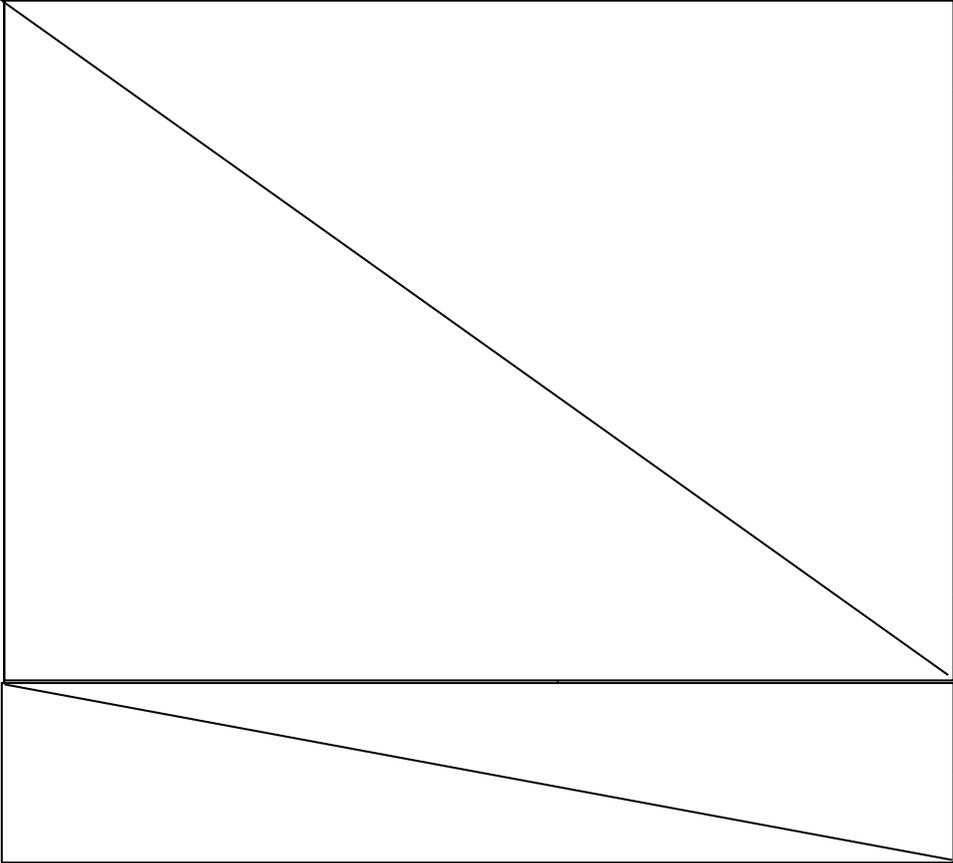
コミュニティ名 小・中・高をつなぐ国語科実践力向上コミュニティ  
代表者所属名 宇治市立北宇治中学校  
代表者職・氏名 杉山 瑞葵 ㊞

京都府若手教員学び合いのコミュニティ育成支援事業報告書

次のとおり報告します。

1 コミュニティ名	小・中・高をつなぐ国語科実践力向上コミュニティ
2 研究テーマ	指導と評価の一体化を踏まえた問題解決型の単元構想についての研究 ～主体的・対話的で深い学びが展開される授業へ～
3 研究の目的	○国語科における学習指導要領並びに新しい評価の在り方を具現化した単元構想・実践に取り組み、指導力の向上を図る。 ○他校種の実践から学び、授業実践力の向上に活かす。
4 研究の成果と課題	小学校、中学校、高等学校の三つの校種で集まり、他校種の教材や実践を交流すること自体が成果であった。新学習指導要領にも学校段階間の接続の重要性は記されており、学びは在籍している学校だけで閉じてはならない。教員も生徒の学びの履歴や予定を意識しつつも、具体的な実践で交流することで、国語科における身に付ける資質能力が明確に捉えられるようになった。国語科では同じ教材が学校種や学年を変えて教科書に取り上げられることがある。例えば、東京書籍中学校2年生で教科書に掲載されている重松清の「卒業ホームラン」は高等学校国語総合の教科書に掲載されている。宮沢賢治の「注文の多い料理店」は小学校6年生の教科書にも、高等学校国語総合の教科書にも教材として掲載されている。しかし、その学年の指導事項に照らし、単元を構想すると、同じ教材や言語活動であったとしても、授業のねらいや、評価におけるBの姿は自ずと変わってくる。学びの連続性を意識しつつも、それぞれの学校種や学年で指導し、児童・生徒の資質能力として身に付けさせるべきことへの責任を自覚した。 また、本コミュニティはメンバー4人、指導助言者1人の計5名でスター

	<p>トしたが、京都府総合教育センターの初任者研修や2年目研修を通して、中学校1名が途中から参加した。次年度にはさらに高等学校1名、中学校2名（講師1名を含む）も参加の希望を示しており、若手教員の学びの場として広がりを見せてきた。</p> <p>しかし、今年度は学習指導要領や新しい評価の在り方の情報共有、日々の実践からの気づきや疑問の共有とその課題解決の手立てに関する共有に留まった。具体的に実践した上で検証し、新たな提案の創造までは至らなかったため、これを次年度の課題とし、具体的に授業参観を通しての研究につないでいきたい。</p>		
5 研究成果の波及方法	<p>今年度は単元構想を考えることが主となった。コロナ禍でもあり、互いの授業を参観することもできなかった。次年度は、今年度から引き続き作成した単元構想について、評価を併せて整理し、授業参観を挟みながら、メンバーで検証していきたい。</p> <p>また、実践については、研究会や京都府総合教育センターでの実践発表を通して波及することを考えている。</p>		
6 研究(活動)実績	年月	研究(活動)内容 (具体的に記載してください。)	活動場所
	8/17	顔合わせ・新学習指導要領と新しい評価についての情報共有・小学校の新しい評価場面について報告。	京都府総合教育センター
	9/12	廣瀬教諭による実践発表：映画のフライヤーに仕立てる言語活動をとおして指導する「弓争い」	京都府総合教育センター
	12/19	メンバーによる実践と疑問の交流・言語活動「弔辞を書く」ことをとおして指導する「ごんぎつね」「握手」「山月記」の提案・三角ロジックを活用する書くことの指導	京都府総合教育センター
	2/27	メンバーによる実践と、疑問の交流・国語の特質に関する事項について概念的な知識の育成にアプローチする指導の在り方（漢字の習得と評価の関係・穴埋めのワークで学ぶ文法ではなく200字で概念を説明する指導等）	京都府総合教育センター

	<p>・小学校における三角ロジックを活用した「書くこと」の指導における効果の報告・学習課題と指導事項を明記し、指導事項を学習活動に具現化した単元の実現に向けた単元構想表の活用。</p>	
<p>7 予算執行状況</p>		

※ 紙面が不足する場合は、適宜行を追加し記入してください。